

A・MUSEUM

vol.46
[2006 3 25]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



オオイヌノフグリ群落



オオイヌノフグリの実

「大」きな「犬」の「ふぐり」

オオイヌノフグリはヨーロッパ原産の外来種^{がいらいしゅ}で、明治時代^{とらい}に渡来^{とらい}したといわれていますが、今では、春先^{はる}に野原や路傍^{ぼう}でよく見られる植物として知られています。

その名の由来は、もともとイヌノフグリという在来種があり、その大がらなものであるということです。一般的に、植物名に「イヌ」がつくものは、「偽物の^{にせもの}」とか「役に立たない」といった意味になります。しかし、イヌノフグリはその実が「犬のふぐり^{いぬのう}（陰囊）」に似ていることから名付けられました。

今年は成年です。地にしっかり足をつけて、オオイヌノフグリの^{いぬどし}ように野原一面に花を咲かせられるような年にしていきたいものです。（資料課 国府田誠一）

第36回
企画展

サルを知りヒトを知る

- 自分たちを探る旅 -

Seeing the Dawn of Human through Monkeys and Apes - Searching our selves -

私たちはどのような生きものなのでしょうか。ヒトは、^{れいじょうるい}霊長類とよばれるなかまに分類され、この中には、ニホンザルのようなサル^{るいじんえん}のなかま、チンパンジーやゴリラのような類人猿^{ぶく}なども含まれています。

<人類がたどってきた道>

霊長類は、今からおよそ6500万年前に地球上に現れたと考えられており、森での生活にからだを適応させながら、進化してきました。そして、およそ700万年前、人類はアフリカにおいてチンパンジーとの共通の祖先から分かれて誕生したといわれています。人類は二本の足で立って歩くようになりました。その後、森での生活に別れを告げ、世界の各地へと広がっていきました。ただし、現在に至るまでの道のりは単純だったわけではなく、700万年もの間には、ほろびてしまった数多くの人類のなかまたちがいたことがわかっています。



世界最古の人類化石 サヘラントロプス・チャデンシス(トゥーマイ)(複製)

<サルとヒト 似てる? 似てない?>

ヒトと他の霊長類を比べてみましょう。すむ場所も動きも全く違いますが、共通点はあるのです。そのひとつが物をつかめるようなつくりをした「手」です。このようなつくりは、木の上を渡りながら果実や葉をとって食べるのに便利です。すむ場所は変わっても、

私たちにも樹上生活者としての特徴が受け継がれているのです。



木登りをするニホンザル
(提供:(財)東京動物園協会)



ニホンザルの手形 指紋や掌紋がある
(提供:(財)日本モンキーセンター)

<進化の隣人・チンパンジー>

ヒトにもっとも近いといわれるチンパンジーは、食物をとるために道具を使うことが知られています。かれらの生態や知能を調べることによって、ヒトの起源を探ろうとする研究が進められています。



木のうろにすむアリを細い枝でつり出して食べるチンパンジー
(提供:西田利貞)

サルを知りヒトを知る。あなたも、この企画展で、自分たち自身がどのような存在であるのかを探る旅に出かけてみませんか。(資料課 飯田 毅)

会 期 2006年3月18日(土)~6月18日(日)
開館時間 午前9時30分~午後5時(入館は午後4時30分まで)
休 館 日 毎週月曜日
(ただし、5月1日、6月5日は開館し、振替休館日はありません。)

大人&子どもフィールドガイド
「チンパンジーとオランウータンに会いに行こう」

日時:2006年5月13日(土) 13:00~15:00
場所:東京都多摩動物公園(現地集合) **要参加費**
対象:大人コース(中学生以上)
子どもコース(小学生のみ)
定員:各コース30名(抽選)

自然講座
「チンパンジーとともに過ごした40年
- タンザニア・マハレでの調査記録 -」

講師:西田利貞氏((財)日本モンキーセンター所長)
日時:2006年6月4日(日) 13:30~15:30
対象:小学生以上 定員:300名(先着順)

お申込は、事前に電話又は当館ホームページにてお願いします。なお、抽選のイベントは、開催日の3週間前までにお申込ください。

1件あたりのお申込の人数は、6名までとさせていただきます。要参加費のイベントは、入園料等実費負担があります。

安全で快適な博物館を目指して 進化基本計画実践報告③

2005年12月、ディスカバリープレイス奥の身体障害者用トイレ内にオストメイト対応トイレを設置しました。オストメイトとは、直腸や膀胱の疾病などにより、腹部に排泄のための孔を設けた方々のことです。オストメイトの方々には、日常の排泄行為で様々な苦勞がありますが、このトイレの設置により、安心してご来館いただけるようになりました。

また、擦り切れて劣化が進んでいた自然発見遊具「動物の巣」のネットを、より安心して遊べるように張り替えを行いました。

さて、博物館の施設は来館者の方が展示を見て、自然に親しみ、体験活動をする上で良好でなければなりません。

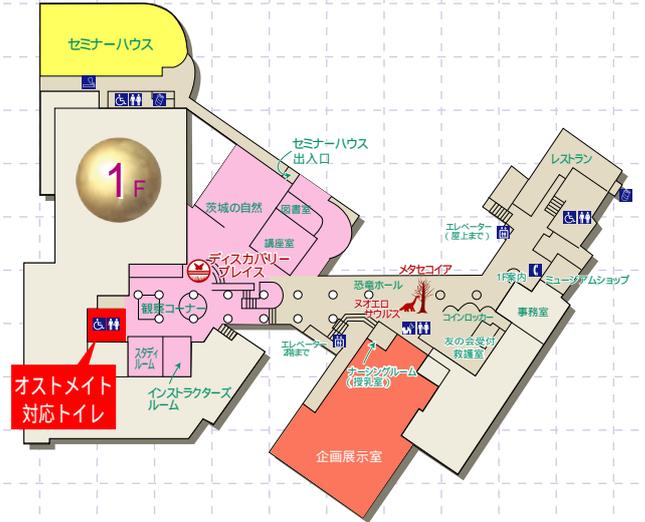
施設には階段、トイレ、水道等のなじみ深いものから、空調・防災・防犯機器、浄化槽、これらを円滑に動かす中央監視装置等の目には付きませんがなくてはならないもの、さらには壁、天井などの建築構造物それ自体まで様々で、博物館が安全で快適な環境であるには、これら全てが良好な状態になければなりません。

当館は開館から11年が経過し、施設の経年劣化が本館・野外施設ともに進み、故障・不調が年々増加しており、一方では既存の施設をより安全かつ快適にし、またバリアフリー化も推進していく必要があります。しかし、これを行うための予算は、厳しい財政事情の中で止むを得ない事ではありますが、年々削減されています。

「進化基本計画」という言葉からは「理想的な将来像」を想像されるのが通常のことと思いますが、日々の修繕に携わっていると、空高い夢よりも、どうしても足下に目が行ってしまいます。増える修繕と減る予算の中で、現在ある設備の維持修繕の割合が大きくなり、「新しい何か」に振り向けられる割合が、どうしても

小さくならざるを得ません。

夢に憧れつつも、安全に直結する部分や、空調・防災・防犯・衛生など、地味ですが決して疎かにはできない部分があり、地味な修繕を繰り返すという、「地に足のついた作業」をコツコツと行うことが、施設の良好な状態の維持という「理想的な将来像」に繋がってくるのではないかと、と野外施設の腐食に悩みながら考えております。
(管理課 最上尚宏)



オストメイト対応トイレ

サル山の観察

「サル山を観察する際にはテーマを絞って見るといろいろな発見に出会える。例えば親と子で見ると、母親は生まれて間もない子どもを胸に抱いて片時も離さない。また子どもも、母親が両手を離して歩いても胸にしがみつきなぜか落ちない。

少し成長した親子で見ると、子ザルはしきりに他のサルや周囲の環境に興味を示し近づこうとする。しかし、母親は足や尾を掴みなかなか行かせない。たまに1m程を越えると

直ぐに抱き上げてしまう。また、仲間と一緒に遊ぶサルの集団の近くには母親が心配気にじっと我が子を見つめているときがある。公園デビュー間もない母親なのかも知れない。」
(中川志郎著「動物は子どもをこんなに可愛がる」を参考としました。)

人類展がはじまりました。私たち人間の進化の歩みを振り返り、子どもの受難が続くなか、サルに負けないしっかりとした親子関係を築き上げたいものです。

コラム by director SUGAYA



イラスト：大原京子(自然博物館友の会事務局)



ジュラ紀の化石約 500点を採集!

私は、大学生時代の2年間、そして、博物館に勤務してからの約10年間、福島県の相馬地方をフィールドに中生代の植物化石を研究してきました。今回は、地元の方々(財)斎藤報恩会の協力で、実現した福島県南相馬市での大がかりな発掘についてご紹介します。

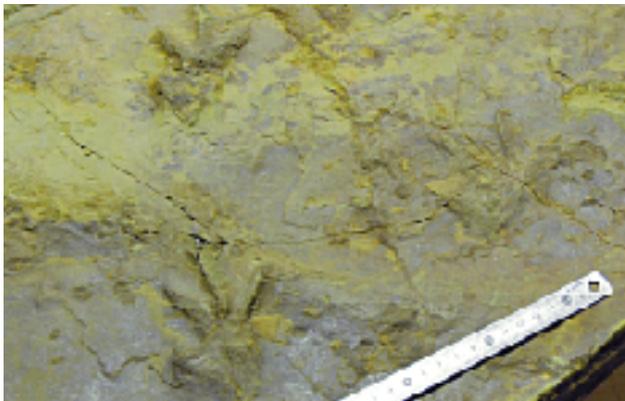
「常磐自動車道の工事で信田沢の崖が崩されるらしい、化石を採集するチャンスですよ」こう伝えられたのが昨年(2015年)の3月のことでした。この情報はこれまでも私の研究のために多くの化石を提供してくれた地元(福島県南相馬市)の知り合いからのものでした。早速、日本道路公団(現在の東日本高速道路(株))や地元の市役所などに連絡を取り、どのような工事がいつ頃行われるのか調べてみたところ、化石を多く含むジュラ紀の地層が夏に掘削されることがわかりました。幸い工事の担当者の方々は快く化石採集への協力を約束してくれ、今回の発掘につながったわけです。工事が行われたのは昨年(2015年)の6月から9月までで、その間は幾度も現場に通い、柱状図の作成や岩質の調査などを行いました。10月から11月にかけては、掘削された岩石から本格的に化石の採集を行いました。この発掘には、当館の職員の他、地元博物館の学芸員、地元の協力者



常磐道関連の工事が行われた崖(福島県南相馬市)



新種の可能性が高い植物(ソテツのなかま)



恐竜の足跡と思われる化石

の方々、共同研究者などが参加してくれました。現在も整理中で正確な数は把握できていませんが、植物化石が500点以上、恐竜の足跡化石と思われるものが4点発掘されました。この中には、新種の植物、この地域からは報告されていない化石も多く含まれているようです。今回の成果については、学会での発表や論文などでの報告、博物館での展示などで紹介していきたいと思っています。(教育課 滝本秀夫)

夜空を彩る星座たち

雲一つない晴れた日の夜。こんな日は空を見上げるのが楽しくなります。そう、たくさんの星たちが夜空をにぎやかに彩っているからです。

しかし!空を見上げたものの、どの星が何という星座の一部なのかかわからず、ただ星を眺めて終わり...そんな方も少なくはないでしょう。

そんな時は第1展示室にある「星空ガイド」モニターにお任せ下さい。ここでは、その日の夜9時頃に見える星座たちを、神話も交えながら

かりやすく紹介してくれるのです。北、南、東、西、真上...とそれぞれの方向にある主な星座や月、惑星などもわかり、とても便利です。

もし最近気になった星があるのなら、ぜひこのモニターで調べてみて下さい。きっと今よりもっと星空観察が楽しくなるはずです。

さあ、春はどんな星座たちが夜空を彩っているのでしょうか。あなたも星座博士を目指してみませんか。(ミュージアムコンパニオン 古賀敦子)

小さな発見 - ミュージアムコンパニオン -



おおくま座

大英自然史博物館レポート



2005年12月5日から16日まで、^{だいえい}大英自然史博物館を訪れました。イギリスのジュラ紀植物化石の調査とこの博物館の教育活動の様子を調査することが目的です。この調査は、(財)カメイ社会教育振興財団の助成により実現しました。

上の写真の建物は1881年に大英博物館の自然史部門としてオープンしました。1963年には自然史博物館として独立し、1985年に隣にあった地質博物館と合併して現在に至っています。資料数は約7000万点、スタッフ数911名、年間の入館者数300万人という数字からもわかるように、ひじょうに大きな博物館です。建物は、写真のようにたいへん美しく、正面玄関を入ってすぐのホールではディプロドクスが迎えてくれます。このホールはイベント会場としても人気があり、夕方6時の閉館後は、パーティーの会場となることもあります。

右の写真はダーウィンセンターという収蔵庫、研究室、^{めうこう}教育施設が融合した新館での教育プログラムの様子で

す。この模様はイギリスの公共放送のBBCや博物館のホームページでライブ放送されています。

今回の調査では、教育活動、化石の研究とともに参考になることが多く、その成果を今後の当館の事業に生かしていきたいと思います。(教育課 滝本秀夫)



ダーウィンセンターから配信されるライブ番組の様子

ウスメバル

ウスメバルは、北海道以南、日本海と千葉県以北の太平洋沿岸のやや深い海に生息します。^{ちぎよ}稚魚は流れ藻について移動し、その後ごく沿岸で底生活を送り、大きくなると深場へと移動します。^{たいせいぎよ}胎生魚で、春に6~7mmの子どもを産み、成長すると大きいもので35cmに達します。ウスメバルの「メバル」とは大きな眼が張り出して見えることから「眼張」や「目張」と書きます。

同属のメバルは「^{はるつけうお}春告魚」として

有名ですが、このウスメバルも^{たけのこ}筍の出る季節に美味しくなるといわれ春を告げるにふさわしい魚です。そのため「筍めばる」ともよばれますが、標準和名が「タケノコメバル」という魚もいてしばしば混同されます。

本物の筍との相性もバッチリで、同じ頃に旬を迎えるので「旬と旬の出会い物」とよばれ煮物がとても美味です。皆さんもウスメバルと筍の旬の出会いを堪能してみてはいかがでしょうか。(水系担当 石坂泰敏)

おさかな通信



ウスメバルの群れ

ディプロドクスのあごの化石

当館の収蔵資料の中には、世界に誇ることができるたいへん貴重な恐竜の資料があります。それは、前ページの写真でも登場したディプロドクスの実物化石で、上顎骨の部分です。この資料は、平成9年にアメリカ合衆国で購入しました。

ディプロドクスは、竜脚類とよばれる四足歩行の植物食の恐竜で、中生代ジュラ紀（2億600万年～1億4400万年前）に北アメリカ大陸で生息していました。体長が20～28mと巨大で、鼻の穴が頭のとっぺんにあり、首と尾が細長いのが特徴です。

ディプロドクスの名前は、「2本の柱」という意味です。それは、腰に近い部分の背骨の突起が二つに分かれていることに由来します。

この標本は、アメリカ合衆国のユタ州のジュラ紀後

期（1億5600万年～1億4400万年前）の地層から発見されました。上顎骨は、人間でいえば鼻の下にある骨で、2本ある前歯（切歯）の間で左右に分かれます。この化石は、その右端の部分です。本来、歯が口の前方に広がって出ていますが、この標本では失われています。

薄い上顎骨をはずすと、太さ7mm程度の鉛筆のような形をした同じ太さの細い歯が並んでいます。さらに横から見ると6列の歯が並んでおり、歯が抜け落ちたら次々と生えてくるつくりがわかります。このように恐竜類の歯は、植物を採るときに抜け落ちるため、一生のうちに何度も抜けかわるシステムをもっています。

当館では、今後、このディプロドクスの上顎骨を常設展示する予定です。ご期待下さい。

（資料課 国府田良樹）



①正面から見たディプロドクス上顎骨 ②薄い上顎骨をはずし、歯を露出させた状態
③左側面から見た状態。次に生えてくる歯が見える

ウグイスのさえずりを聞きましたか？

春の訪れを野鳥のさえずりで気づく。素敵なことですね。ウグイスは「春告げ鳥」ともよばれ、春が近いことを私たちに知らせてくれます。でも、ウグイスにとっては自分のなわばりを確保し、メスをよぶための大切な行動なのです。しかしそれは、天敵に自分の身をさらすことになるので、子孫を残すことは、まさに命がけです。

博物館周辺でウグイスが鳴き始めるのは2月から3月にかけてです。この鳴き始めを「初鳴き」といっています。桜前線と同様にウグイスの初鳴き前線も南からだんだんと北上していきます。そのため北海道などの北の地域では5月頃に初鳴きを聞くようなところもあります。

ここ坂東市では、ウグイスが「市の鳥」に制定され、市民に愛されています。（教育課 橋本 武）



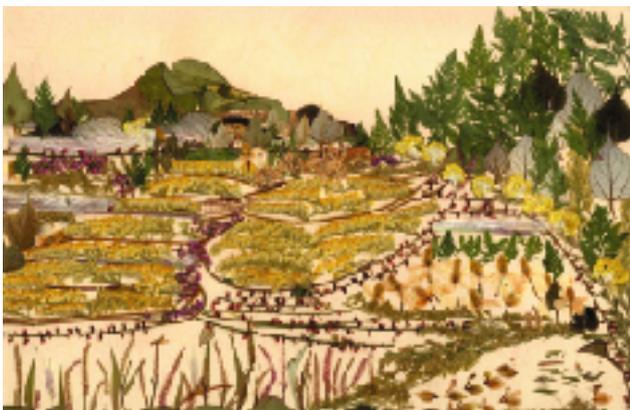
ウグイス

トピックス

押し花で自然を再現ー第9回押し花絵コンクールー
当館では、課題植物押し花絵コンクールを毎年開催しています。9回目を迎えた今年のテーマは「菅生沼 - 多様な茨城の自然 - 」でした。難しいテーマでありながら、菅生沼に対して希望や願いをこめて製作された作品や身近にある里山、茨城の自然を独自の観点でとらえたユニークな作品がそろいました。

作品は12月14日から1月9日まで企画展示室で展示され、多くの皆様にご覧いただきました。コンクールは来年度も行う予定ですので、ぜひ挑戦されてみてはいかがでしょうか。（教育課 戸来史絵）

館長賞	山口八重子「里山の秋」	一般の部
副館長賞	小故島和子「アオサギ」	一般の部
副館長賞	佐藤 敏子 「癒しのある風景 - 菅生沼と筑波山 - 」	一般の部
優秀賞	松枝 敦子「県の鳥 ヒバリ」	一般の部
優秀賞	篠原 千種「白鳥の来る菅生沼」	一般の部
優秀賞	小島 大気「自然と共存」	中学生の部
優秀賞	新明 瑠月「花畑と自然」	小学生の部



館長賞「里山の秋」

菅生沼に珍客 - ヒシクイを確認 -

当館で活動しているボランティア野鳥チームは年間を通して定期的に、博物館野外や館周辺の野鳥を調査しています。その野鳥チームが当館に隣接している菅生沼でヒシクイを今年初めて確認したのは1月14日です。博物館の東側の菅生沼でアオサギなどに混じって餌をついばんでいる姿を確認しました。その後も場所を少し変えながら、時々姿を見せています。当館ボランティア野鳥チームが1995年に調査を開始して以来、菅生沼でヒシクイを確認したのはこれがはじめてです。

ヒシクイは稲穂などの穀物や水生植物の根や地下茎などを食べていますが、ヒシの実を好んで食べることから、この名前が付けられたといわれています。日本には冬鳥として渡って来て、主に東北地方や北陸地方で越冬します。今年は例年に比べて越冬地に雪が多かつ

たため、餌を求めてここまで来たのではないかと考えられます。（教育課 椿本 武）



菅生沼で見られたヒシクイ（奥はコハクチョウ）（撮影：篠原一夫氏）

自然教室「魚のはく製づくり」

魚拓やはく製などを一般公募により展示した第4回市民コレクション展「釣った魚に魅せられて」が2月26日に終了しました。今回の魚のはく製づくりは、大人の方のみのイベントでしたが、趣味の延長として釣った魚を残したいという釣り経験豊富な方から、釣り経験の浅い方までいろいろな方が参加しました。

当日は、魚を扱うことになれている方でも、かなり悪戦苦闘していました。自然博物館らしく化学薬品の使用に頼らず、ニジマスの口から内臓を取ったり、身や骨をはがして皮だけにするまでで午前中の工程を終了しました。午後からはニジマスの中に貝殻を砕いた粉を詰めて形を整え、徐々にもとの魚の姿に戻して、はく製を完成させていきました。全員が真剣に取り組む姿が印象的でした。

参加者のほぼ全員が初めて体験したにもかかわらず、乾燥とニス塗りで完成というところまでできました。残りは自宅で仕上げようと持ち帰っていきました。

これからも、大人の方が楽しめるイベントも充実させていきたいと思えます。（企画課 村山 哲）



魚のはく製づくりに挑戦！

折り紙で恐竜をつくろう！



どんな恐竜ができるかな！？

平成 18年 1月のサンデーサイエンスは、「折り紙で恐竜をつくろう」というテーマで実施しました。今回はこれまでとちょっと趣向を変えて、家族で取り組むことに主眼をおいてみました。当館は、小学生とその家族という組み合わせのお客様の割合が多いこともあり、そのような方々にさらに博物館を楽しむ場を提供しようと考えました。もちろんこれまでどおり、個人で参加するお客様も大歓迎しました。

さて、その内容ですが、画用紙と折り紙を使って、「飛び出す絵本」ならぬ「飛び出すミニジオラマ」をつくります。まずはじめに、当館学芸員が恐竜とその時代の地球環境について、さまざまな化石を用いて紹介しました。そして、いよいよ作業開始！家族みんなで協力しながら、恐竜と当時の環境を再現していきます。ハサミを巧みに使い飛び出す絵本の台紙作りに熱中す

るお父さん、正確さに美的センスを加えつつ今にも動き出しそうな恐竜を折り上げたお母さん、そして、植物の化石から想像力豊かに当時の環境を色鉛筆で描きあげた子どもたちと、私たちスタッフにも、参加された皆さんの熱い創作意欲と強い家族の絆が感じられました。

当館では、これらのすてきな作品を、多くの皆さんにも紹介しようと考え、3月21日(火)～4月9日(日)まで、「折り紙恐竜ミニジオラマ」として展示することとしました。ぜひ、ご覧下さい。(教育課 高橋 淳)

編集後記

今年の冬は当初の暖冬予想からうってかわり厳冬となってしまいました。本当に久しぶりに寒い冬だったような気がします。我が家でも灯油が高かったこともあり暖房を節約し、そのため今年の冬はより一層寒さが身にしみました。待ち遠しかった春ももうすぐ。博物館も春を迎え、コハクチョウも旅立っていきました。(T.N.)

[交通案内]



常磐自動車道谷和原ICから20分
つくばエクスプレス守谷駅下車
～関東鉄道バス(急行ばんど号)
「岩井行き」又は「猿島行き」乗車
～「自然博物館」下車、徒歩5分
JR柏駅で東武野田線乗り換え、
愛宕駅下車～茨城急行バス
「岩井車庫行き」乗車～「自然博物
館入口」下車、徒歩10分



[開館時間]

午前9時30分から
午後5時まで
(入館は4時30分まで)
ペット及び遊具等のお持ち込みはご遠慮ください。

ご利用案内

[入館料]

区分	本館・野外施設		野外施設のみ
	企画展開催時	通常時	
大人	720円(580円)	520円(420円)	200円(100円)
高校・大学生	440円(300円)	320円(200円)	100円(50円)
小・中学生	140円(70円)	100円(50円)	50円(30円)

(注)：()内は団体料金(20名以上)

未就学児・昭和13年4月1日以前に生まれた方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。

次の日の入館料は無料です。

4月29日(みどりの日) 6月5日(環境の日)
11月13日(茨城県民の日) 春分の日
高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

[休館日]

毎週月曜日
5月1日(月)、6月5日(月)、8月14日(月)は開館し、振替休館日はありません。
7月17日(月)、9月18日(月)は開館し、翌日が休館となります。

自然博物館ニュース A・MUSEUM(ア・ミュージアム)
A MUSEUM (AMUSEMENT+MUSEUM)

企画・編集:ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課 / 発行2006年3月25日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL0297-38-2000 FAX0297-38-1999
ホームページ <http://www.natpref.baraki.jp/>
E-mail webmaster@natpref.baraki.jp
メールマガジンも配信中。登録はホームページから

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。